2020年の「英語改革」とは？

■なぜ、英語教育の改革が必要なのか？

・日本国内で働く外国人の数が

2008 年は約 49 万人⇒2016 年には**約１０８万人**

・海外で暮らす日本人の数が

2004 年は約 96 万人⇒2016 年には**約１３４万人**

⇒**さまざまな文化や言語**をもった人々と一緒に働く未来はすぐそこにあります。

■求められる英語力は？

●小中高を一貫した指標で目標設定

●高校卒業時に **CEFR のＡ2～Ｂ１レベル以上が目標**

〈CEFR とは〉

欧州評議会が作成した、外国語の学習・教授・評価のための言語共通の参照枠組み。
能力は「～ができる」という CAN-DO によりレベル定義されている。
レベル A2 例：身近な範囲での日常会話ができる。
レベルＢ１例：旅行時、起こりうる大半の情報に対応できる。

■英語の教育のどこが変わる？

①小学３・４年生で「**外国語活動**」が始まる

②小学５・６年生で「**教科としての英語**」が導入

③中学・高校の英語授業は「**英語で行うことが基本**」

④大学入学共通テストで「**４技能評価、民間資格・検定試験**」の活用

①小学３・４年生で「外国語活動」

- ●年間授業時間：**35 時間**
- ●英語の音声やリズムなどに慣れ親しむ
- ●言葉としての面白さや豊かさに気づく
- ●聞く・話すことの言語活動

②小学５・６年生の「英語」

- ●年間授業時間：**70 時間**
- ●**成績評価あり**
- ●活字体の大文字、小文字
- ●文および文構造の一部
- ●聞く、話す＋文字指導（読む、書く）の導入

③中学・高校の「英語授業」

●中学・高校の英語の授業は

「英語で行うことを基本とする」

●高校では、さらに「論理・表現」の科目新設

「話す」「書く」を中心に発信力を強化し、スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッションなどを行う。

④大学入学共通テスト

●２技能：聞く・読む

⇒４技能：聞く、読む、話す、書く

●民間資格・検定試験を活用

●2024 年度以降の英語試験は、

民間資格・検定試験に一本化

●2020～2023 年度は、

共通テストと民間資格・検定試験が併存

Benesse のホームページより